

〔書評〕

安直哉著

『国語教育における形象理論の生成と展開』

井上 雅彦

1 はじめに

安直哉氏（岐阜大学教育学部教授）は、立命館大学文学部日本文学専攻を卒業後、筑波大学大学院で国語教育を学び、研究者の道に進んだ。話しことは教育を主たる研究対象とし、その成果を『聞くことと話すこと』の教育学―国語教育基礎論』（東洋館出版社、一九九六年）、『イギリス中等音声国語教育史研究』（東洋館出版社、二〇〇五年）として上梓した。その後、「読むこと」へと研究領域を広げ、二〇〇四年から二〇一四年までの十数年にわたる「形象理論」に関連する十五の論考と書き下ろし一編をまとめたのが本書である。

2 形象理論

形象とは心に思い描く姿・かたち（イメージ）の意であるが、文学においては言語そのものが姿・かたちを表しているのではない。言語は読み手が読み取ってこそ姿・かたちとなる。垣内松三は「雪片を手に取りてその結晶を覗くとする時、掌上にあるものは一滴の水なり、水滴を分析して結晶を覗くとするが如きが今の言語・文学研究の態度なり。言語・文学の本質を覗くとせば、直下にその微妙なる形象を観取せざるべからず」（『国語の力』大正十一年）のように述べて、形象を分析的にではなく、直感的・全体的にとらえるべきだと主張した。そして、文学的文章を①叙述的機構、②表現的機構、③象徴的機構の三層としてとらえ、その理會過程を①形象の直観、②形象の自証、③形象の証自証（理

会」と措定した。垣内の形象理論は「近世の文学・哲学・言語論を撰取して独自の体系を築」き、センチンス・メソッド、三読法などの指導法として国語教育界に大きな影響を与えた。

3 本書の概要

本書では、形象理論がどのように生成されたのか、形象理論を基盤として発展を遂げた「国語教育解釈学」がどのように展開したのかを明らかにしようとしている。「序」「結論」と、三部に分かれた十六の章からなる。本書の目次は以下のとおりである（各章の見出しと各章の節の数を「へ」に挙げる。序と、結論・初出一覧・参考文献・あとがきは省略した）。

第一部 形象理論の生成過程

- 第一章 開発教授期の読み方教育〈6〉
- 第二章 形象理論の浸透背景〈7〉
- 第三章 形象理論とウィリアム・ジョーンズ〈3〉
- 第四章 形象理論とエドモンド・ヒューイ〈3〉
- 第五章 形象理論の淵源〈5〉
- 第六章 垣内松三初期国語教育学説の考察〈6〉
- 第七章 センテンス・メソッドの思想〈5〉
- 第八章 国語教育におけるセンチンス・メソッドの考察〈4〉
- 第九章 垣内松三と飛騨教育会夏季国語教育講習会〈6〉
- 第十章 形象理論と倒語説〈7〉

第十一章 国語教育のアレゴリー〈8〉

第二部 形象理論の展開過程

第十二章 国語教育解釈学の生成〈7〉

第十三章 国語教育解釈学の理論的一考察―歴史的主体序論―〈5〉

第十四章 戦時体制期の国語教育解釈学―「国民国家」に乗り捨てられる〈国民〉―〈5〉

第三部 形象理論関連論考

第十五章 鍛錬主義国語教育の系譜〈6〉

第十六章 「青い煙」の形象―教材「ごん狐」最終文の解釈―〈4〉

第一部では、国語教育における形象理論の生成過程について考察している。読み方教育・文章理解の方法にはワード・メソッド（単語法）とセンチンス・メソッド（文章法・全文法）がある。ワード・メソッドは新出文字や難語句の注釈・説明から始めるのに対して、センチンス・メソッドは文・文章から入るもので文章全体の通読・直観を出発点とする。センチンス・メソッドは形式的・要素的なワード・メソッドへの批判として生まれ、大正末期から昭和期にかけて国語教育の方法として取り入れられた。それは垣内松三が『国語の力』で「文の読方としては、文全体から出発し、文を以て統率する方法としての Sentence method に近づいていくより外に、それに活力を加える方法はありません」と提唱したことがきっかけだといわれる。

第一章では、日本におけるセンチンス・メソッド導入は、実際には明治十年代後半であり、それはジョホノットの開発教授法が日本に紹介されるなかで導入されたと論究している。しかし、当時は伝統的な注入主義が根付いており、センチンス・メソッドを受け入れる土壌が無かったため、広まることがなかったと述べている。

第二章では、大正期になってセンチンス・メソッドが受け入れられるようになった教育文化上の基盤を解明している。大正自由主義下に自学主義の読み方教育論が展開され、全文の通説が定着する。それはセンチンス・メソッドと相通じる読書過程であった。さらに大正生命主義によって、読者を発見・定位することとなったが、読者に重きを置き過ぎたため主観的な読みに流される傾向があった。その揺り戻しとして、文章とその背景にある作者を見据える形象理論の発芽があったと考察している。

第三章～第五章からは、ウィリアム・ジョーンズ、エドムンド・ヒューイといった先学から、垣内がセンチンス・メソッド、「直感・自証・証自証」といった指導理論を受容した過程とそれらにまつわる諸問題について明らかにしている。

垣内の形象理論は、読者の主体性を欠落させた理論であると批判されることが多い。しかし、形象理論による国語教育解釈学は、本来読者重視の思想を内包していると『石叫ばむ』をもとに指摘している。さらに「直感・自証・証自証」という読みの過程において、「自証・証自証」には読者の個性を取り込んだ読み方

が求められていると第六章では記している。

第一章で明治十年代にセンチンス・メソッドの思想が移入されたことを論究しているが、このセンチンス・メソッドは直観教授的思想と親和性の強い文章読解法である。この直観教授的思想が大正末の国語教育界で復活することによって、センチンス・メソッドが広がる契機となったと第七章では論じている。

第八章では、日本の国語教育におけるセンチンス・メソッドの導入は、世界の動向と趣を異にしていたことを明らかにしている。大正期の生命主義の思想、および直観主義の思想は、物事の全体像を総合的・統一的に理解するという共通点をもっていた。このような背景から全文通説の学習過程が普及し、そこにセンチンス・メソッドという理念が一致したと記している。

第九章では、垣内の形象理論が地方に伝授される一事例を示している。

第十章では、心と言葉との間に「ひずみ」があることが芸術味をもたらすという垣内の形象理論は、江戸時代後期の国学者・富士谷御杖の倒語説の影響によって成立したことを明らかにしている。「倒語」とは西洋レトリックの換喩に相当する表現法である。換喩は句や文に限らず、文章全体や文学作品全体にも機能する。形象理論とは文章全体を一種の換喩表現（アレゴリー）として読むことによって、文意を観取する方法論であると述べている。

第十一章では、高木市之助がリアリズムに基づいて書いた教科書教材「軍艦生活の朝」「石安工場」が本人の意図とは違い、ア

レゴリー的に受容されていたことを明らかにする。そのうえで、アレゴリーによって文学教材を解釈するのが国語教育における読み方の本質的な性格であると主張する。

第二部では、国語教育における形象理論の展開過程を考察している。形象理論を基盤として発展をした「国語教育解釈学」の戦時下における位置づけについて論究している。

第十二章では、国語教育解釈学は、「自己を読む」読み方と、規範主義的読み方（日本精神主義）という異なる読み方を共に連結して誕生したことを述べている。

第十三章では、この一見矛盾する読み手の位置づけがどうして生まれたのかを考察している。本来解釈学は読者尊重の読みに還元される。しかし、そうした解釈をするためには相応の知識と経験が必要となるが、児童はそれを持ち合わせていない。したがって一定の読みの型を教えることになり、規範的な読み方を示すことになるかと考察している。

第十四章では、戦時体制期の国語教育解釈学が、解釈の柔軟性を失い、硬直化していったことを説明している。

第三部では、形象理論に関連する論考を二つ掲載している。第十五章は、戦時下では身体主義、または鍊成主義的な素読教育が形象理論の解釈学を押しつけて盛んに行われていたことを明らかにした。第十六章では、「こん狐」の最終文「青いけむり」あたりの解釈をもとにして、解釈には「言外の文化常識」が必要であり、形象理論が「言外の文化常識」に拠って立つことを示してい

る。

4 おわりに

本書は形象理論の生成と展開について、古今東西の幅広い分野から資料を渉猟し、緻密に分析、考察した労作といえよう。また、随所に新しい見方を示しながら、形象理論の本質について「形象理論の基本には、西洋レトリックという換喩の技法が認められる（中略）。換喩を中心とした比喩を用いてはじめて真理の示唆的表現が可能になる（中略）。これが国語科読み方教育の基本構造なのである」という言は卓見である。欲をいえば、難解な形象理論について、具体的な説明と全体像の提示をしていただければ、各章の内容上のつながりが明確になり、初学者にも本書の価値が十分理解できるのではないかと思った。

注

(1) 村井万里子「形象理論」、高木まさき他編著『国語科重要用語事典』明治図書、二〇一五

（東洋館出版社、三六三頁、二〇一五年三月刊、本体価格五〇〇〇円）

（いのうえ・まさひこ 本学教授）